

今年も中学・高校のクラス会が銀座でありました。野の草花のように元気一杯だった私たちは、風に乗って、故郷を離れ、大都会で暮らすようになりました。都会の色に染まって、すこし垢抜けしたような気持ちにもなり、お洒落にも気を使っていますが、もちろん、何食わぬ顔をしています。今年、私たちは後期高齢者のゾーンに入り、弱さ、心細さがないとは言えません。けれども、集まった大和撫子は熟女、猛女の域に達しました。食後に、食べ放題のスイーツを次々お代わりし、精一杯生きようねとエールを交わし、カラオケの映像を見ては故郷を懐かしんで合唱しました。



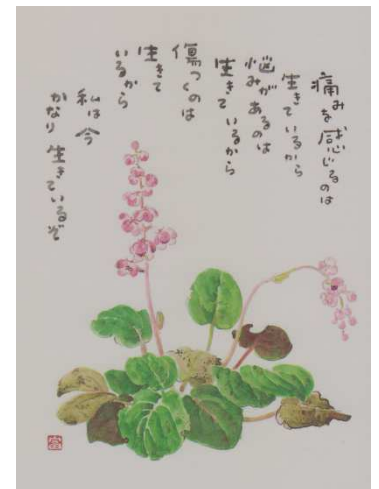
いまだに現役で活躍している友人は、仕事も従来のやり方では不十分になった。特に人との関わり方は随分変わり、新しい企画、アイデアを提供し、自らを低くしていく必要が出て来たと言われました。社会と関わり続ける人は、積極性と若々しさが光ります。

子どもを先に見送らねばならない事態になった友人は、今も涙なしにはそれを語れないほどの悲しみです。けれども、母として、妻として家族を支え、日常の生活を担う務めを果たさなければなりません。その淡々とした、けれども忍耐のいる日々を、今まで守られてきたと、受容する姿は素敵でした。

配偶者や家族が車椅子生活になった、体調不良を訴える、病気再発の心配がある、病後の機能障害がある、と介護を担当することになった友人もいます。当然のように、そちらを優先して一足先に帰った人もいました。もちろん自分の健康もそれぞれ気になるところが出てきています。運転などもいつまでできるかしら、でも病院に行くためには必要なのよねと弱音と本音が混じります。

幹事が丁寧に連絡を取ってくれて、今まで参加してきたのに、病床に伏していたり、外出は一人では不安だという人の消息も知らされました。死への道を私たちは今、進んでいます。「古い」の現実に接し、これからどんな「断・捨・離」を味わっていくのかなと思わせられました。

普段、友人と銀座で会う時は、教文館3階の本屋を待ち合わせ場所にしています。せっかく銀座に来ましたので、教文館に星野富弘の新作初公開の「花の詩画展」を見に行きました。星野氏は青春真っ盛りの24歳の時、頸椎損傷の怪我を負い、手足の不自由な体になりました。病床で口に筆をくわえて、詩や絵をかき始め40年以上になります。想像を絶する困難、不自由、苦しみがあったことでしょう。けれども星野氏の作品は素朴な美しさ、優しさの中に、「あるがまま」を受容した、清々しさがあります。可愛い天使のような言葉が、温かさや感謝の思いを胸に灯してくれるような感じがします。56枚の小品を眺め、楽しく、また、励まされるような思いになりました。



買い求めた絵葉書に、一葉草の絵に添えて「痛みを感じるのは生きているから/悩みがあるのは生きているから/傷つくのは生きているから/私は今/かなり生きているぞ」がありました。生きていけば「痛み、悩み、傷」と無縁の人はいないでしょう。それを感じるからこそ、生かされていることも感じられるのです。与えられた命を大切に、生き生きと生きたいと願わずにいられません。